瀬戸の中の『民藝』

Fork Art in Seto

Key-words：Seto ceramic ware, Fork art

水野　雄介
Yusuke MIZUNO

1. はじめに

「せともの」で知られる瀬戸（図1）で陶業を営む筆者に「民藝」というテーマを与えられたことは，とても悩ましい依頼であったことを冒頭で述べておきたい．なぜなら，九州や沖縄の仕事のようにわかりやすいイメージがある「さんち」とは違い，筆者の仕事が，一大産地まで到達した現在の瀬戸の姿と大きく異なるからである．

2. 瀬戸焼のあゆみ

瀬戸焼きの始まりは奈良時代，瀬戸の南に位置する猿投窯において灰釉を用いた陶器誕生を起源とする．平安時代に入ると現在の瀬戸市でも生産が始まり，鎌倉～室町時代にかけて生産された中国陶磁をモデルとした中世唯一の施釉陶器「古瀬戸」の登場により瀬戸は日本における陶器生産の中心となっていった．15世紀に入ると日常食器の生産へ移行するが，お茶の流行に伴い茶陶の生産が盛んになる．中でも安土桃山時代，瀬戸の陶工たちが美濃地方に北上し，そこで黄瀬戸・志野・織部といった桃山陶器が生み出されたことは日本焼物史において大きな成果（図2）となったことは言うまでもない．そして，江戸時代になると尾張藩の管轄下の元，藩主徳川義直はもう一度，瀬戸の活性を図るべく美濃から瀬戸へ陶工を呼び戻し尾張藩保護の下，瀬戸はさらに大きく発展していくこととなる（図3，図4）．

江戸時代後期，瀬戸は磁器生産を開始させ一大転換期を迎える．これ以降新しく登場した磁器を「新製焼」，元々の陶器の仕事を「本業焼」と区分するようになる．やがて磁器生産は陶器生産を凌ぐようになり，明治時

図1　陶土採掘場（瀬戸キャニオンと呼ばれている）

図2　器集合写真（黄瀬戸，鉄釉，緑釉，三彩，麦藁手，等）

図3　連房式登り窯．4連房で1949～1979年まで稼働．江戸後期創業より戦時中までは13連房もある巨大な登り窯を使用していた．

図4　登り窯内部．投げ込まれた薪による自然釉が壁面につく．

© 日本セラミックス協会

代に入ると「効率の良い技術の近代化」が進み，組織が確立されて現在の瀬戸に至る．生産する焼物の種類も食器にとどまらず，ノベルティー・碍子・建築陶材・ファインセラミックス等，多種多様で個人の陶芸作家から窯元，企業まで業態もさまざまである．

3. 民藝

「民藝」とは「民衆的工芸」の略語で 1925 年に柳宗悦と美の意識を同じくする濱田庄司，河井寛次郎，バーナード・リーチといった人々によって生み出された言葉である．「庶民の暮らしとともにある手仕事」それはすなわち「民衆の，民衆による，民衆のための工芸」とも言えよう．当時，美術に関わる人たちが決めた美の基準とは違い，こうした日常の中の美を積極的に評価する者はいなかった．しかし，それがかえって人々に親しみやすく日々の暮らしにも取り入れやすく「民藝」はすぐに広まっていった．

4. 民藝と瀬戸

柳宗悦は南北に長い気候風土の違う土地土地を巡り，日本を「手仕事の国」と表し，その旅の中で瀬戸へは 1940 年代に訪れている．そして，1964 年になると濱田庄司，バーナード・リーチが瀬戸本業窯へ視察に訪れ（**図 5**），筆者の祖父である六代目半次郎を励まし指導した．祖父はこの出会いにより民藝思想に深く感銘を受け，瀬戸本業窯の歩む道の正しさに確信を得る．この決断は当時，近代化の進む瀬戸で窯業に関わる者ならば決して容易ではなかったはずだ．その後，父である七代目半次郎がその志を受け継ぎ，その姿勢を貫き続けている．

5. 今後の展望

一大産地まで上り詰めた瀬戸も今となっては苦戦を強いられている．多種多様な瀬戸だから生き残る術を失ったわけではないが，食器の分野は先の見えない状態だ．一体何故なのか．

筆者の知るたった数十年の間にも大型店舗が建ち並び，大量生産による大量消費が繰り返され，物が飽和状態にある．そこに「人」や「手」の気配を感じることは少なくなり無機質で均一化されてしまった．柳宗悦もまた，大量生産社会への警鐘を鳴らし続けたが今を生きる私たちには避けることのできない現実だ．とは言えその便利さをすべて手放すこともできない．一体どうしたら良いのか，ここでもう一度「民藝」を思い出してみたい．柳たちが大切にした美，生活，人間，自然，物，風土，風習，手仕事，歴史，伝統といったキーワードから今後を生き抜くヒントが見えてくる．これは作り手のみならず，配り手，使い手にも言えるのではないだろうか（**図 6**）．

図 5　（左）バーナード・リーチ，（中）濱田庄司，（右）六代・水野半次郎

図 6　作陶する筆者

そのために「人と自然と物との調和」つまりバランスのとれた社会を再構築し，心の通いあう関係を修復していくことがこれからを生きる私たちの課題となるはずだ．その先に日本固有の豊かな文化が守られ，その下に経済が育つ世の中になることを願うばかりだ．

「古きを守るも開発なり」（柳宗悦）

筆 者 紹 介

水野　雄介（みずの　ゆうすけ）

池坊で華道，裏千家で茶道を学ぶ．江戸時代から続く窯元に生まれ，「水野半次郎」を代々襲名．六代半次郎（祖父）が当主のころ，バーナードリーチ・濱田庄司・河井寛次郎・芹沢銈介が当窯に視察に訪れ，柳宗悦の提唱した『民藝』に出会う．現在も民藝思想に基づき父，七代目半次郎のもとで毎日作陶に励んでおり，坦々とした姿勢で仕事をしていくことが，後世につながる一歩だと考えている．「せともの」として知られる愛知県瀬戸市で元来からつくられてきた陶器を“本業”と呼ぶ．昔ながらの分業制を守りながら実用的なうつわを作り続けている．地元の土を使い，自ら作る釉薬，紋様等は多岐にわたり，主に黄瀬戸，三彩，馬の目，麦藁手，等が代表的．伝統は八代目へと受け継がれている．